

# ロシア革命記念講演

原一美

(フォトニュースひろば編集長)

この講演記録は昨年尼崎でもたれた十一・ハロシア革命映画講演集会での講演を主催者の責任で要約したものです。

今の映画（資料①）は一九六四年に、ソビエトの中央記録映画撮影所で製作されたもので、スターリンのあと、フルシチヨフの時なので、映画にはスターリンも、トロツキーも出てこないという問題はあります。スターリンに肅正された人々が革命で果たした役割を復権したいということで、多くの革命の英雄たちが登場しています。

映画は、一七年の二月の革命から二二年の全土の解放に至る歴史を撮つたものです。その映画の中から少しふれて話に入ります。

#### 〔一〕

一七年四月、レーニンがペトログラードに帰つてきて駅頭で演説する場面がありました。二月革命でツアーリを倒した後も戦争を続行する臨時政府に対し、レーニンは、「平和」を要求して臨時政府の打倒を主張しました。これから、ボルシェビキの四月協議会を経て、十月社会主義革命へ、革命の第二段階への転換が始まります。

ロシア革命の最大のテーマは「平和」でした。

映画にもあつたような戦争に伴う膨大な犠牲に対するわけです。

してどうするのがという問題を、当時、帝国主義列強の中で唯一、戦争に反対する党を持つていたロシアが、その党のもとにこれを解決したといふことだと思います。

ロシア革命のスローガンは「平和と土地とパン」といわれます。一つは平和でした。二つ目が土地です。映画にも「土地の布告」や共同作業の場面がありました。

地主から土地を没収して農民に分ける。これは、社会革命党という農民に基礎をおいた小ブルジョア的な政党の綱領を、ボルシェビキが実施したものです。よく「綱領を盗んだ」といわれるのですが、社会革命党は実施できなくてボルシェビキがそれを実施したことが、内戦においても、農民が労働者の霸権と結びついて革命の側で大きく現れるということをもたらしたわけです。

レーニンがながくトロツキーと論争して主張してきた、労農同盟、労働者と農民の革命的民主的独裁という理論がここに実を結んだのだと思います。こうして、映画にも出てきました七月のコルニコフの反乱を打ち碎いて、十月で革命を達成す

映画では四番目の場面になりますが、ハンガリーのベラ・クンの演説や、バイエルンのレーテなど、いろんな場面がでてきました。結局ロシアでは勝ったが、他では敗れ去る。それ以降、四九年の中国、六〇年のキューバ、七五年のベトナムなど、植民地・従属国での革命は大きく前進しましたが、現在八五年に至るまで帝国主義列強での革命は未だに成就していない。これがまず考えるべき現実です。この中でどう今の時代を考えるのかといふことで話をします。

## (二)

この間「共産主義における左翼小児病」の読み合せを何人かの仲間とやってきたのですが、その中でレーニンは、ロシアでは革命を始めるのはたやすく、ロシアには四つくらいの特殊な条件があつたと言っています。

一つは、全権力をソビエトに移して、臨時政府を倒す、そういう体制の変革と、戦争の停止、飢餓からの解放とが直接に結びついていることを全体が理解する、ということがあつた。

どう考えたらよいか。先日の「社会主義理論フォーラム」という集まりでも、「緑の人たち」が「共産主義、マルクス主義は誤りだ」と主張して、何かそんなムードになつたそうですが、そういう理論的な低下という問題が、今日の私たち共産主義者にはあると思うのです。

例えれば反戦派の中に「ソ連は社会主義じやない」とか、「新ツアード」とか言う人があります。黒田寛一という人も、「ソ連には貨幣がまだあるし、分配も平等ではない」と言つています。この議論は形をえてどこにでもあると思います。

しかし、よくマルクスやレーニンの本を読めば、共産主義の低い段階、つまりプロレタリアートの独裁期には、まだ充分な生産物がないわけで、「能力に応じて働いて、必要に応じて分配する」ことができないのである——今のソ連はそうですね——その段階では、やはり「能力に応じて働いて、その労働に応じて分配する」ことになる。そしたらやはり複雑な労働、例えば医者、技術者、には多く分配されるのが当然なわけです。

共産主義社会が資本主義社会から生まれる限り、あらゆる点で、つまり、経済的にも、道徳的にも、

二つ目には帝国主義列強の、同盟国側と協商国側というブロック間の対立があり、その間でロシア革命が一時期存在できた。

三つ目にはロシアの広大さ。ナポレオン戦争でもそうだったように、広大な国土と未発達な交通が地域的な赤色政権の持続を可能にした。

四つ目には、ボルシェビキの前身であるロシアの革命運動、特に、「人民の中へ」「ブ・ナロード」という運動が巨大な規模で農村に入つていて、その結果、土地の没収を革命政権が布告すると、その実現が可能なほど強い、民主主義的な運動が農村にあつた。

ただ始めるのが簡単だつただけ、持続するのが難しいということだ、ともレーニンは言つています。列強の干渉があつて、その中で期待した列強の革命は敗れ去り、ロシアの革命が困難に陥つて、それに耐えて今のソ連がある。このことについて、私たちがソ連について論じる時にまず考えるべきだと思います。

以後、ロシアのボルシェビキを中心コミニテルンが作られるわけですが、今日に至るまで、さまざまな反ソキャンペーンがある。それについて

精神的にも、この社会が出てきた母胎である旧社会——資本主義社会の母斑がまだくつっているわけで、労働証書制（社会の各成員が社会的に必要な労働の一一定部分を遂行して、これこれの量の労働を給付したという証明書を社会から受けとる。この証明書で、彼は消費手段の公共の倉庫からそれに相当する量の生産物を受けとる制度）の労働証書も、その、共産主義の第一段階では、資本主義社会まで慣れ親しんできた貨幣という形をとるのが必然的だし、また、労働それ自体が第一の生活欲求となつてはいらない共産主義の低い段階では、この間、新聞によく載つています「利潤概念の導入」や「競争原理の採用」とかの迂回、妥協も当然とりうる政策なわけです。

内戦時にネッピー新経済政策を採用したり、コルホーズ＝集団農場で自留地を認めたり、その生産物の売買のための自由市場を作るとかもそうですね。共産主義の低い段階、第一段階では、資本主義の伝統や痕跡から完全に自由ではないわけです。共産主義かどうかは、生産手段が私有財産ではなくなつてゐるかどうかで論じるべきです。

にもかかわらず、黒田寛一は、何か突然発見し

たかのように言いたてているわけです。中核派という党派も、この教説を採用して今に至るわけで、反戦派の半分くらいは、このような見解をとっている。(ここに理論的な問題があるのだと思います。本当はどういう所に、例えればソ連のことであれば問題があるのか。

レーニンがコミニンテルン——先程映画にもでてました——の一九二〇年第二回大会で「ロシア一国の民族的なプロレタリア独裁から、国際的な、少なくとも数個の先進国でのプロレタリア独裁を樹立しなければ世界政治全体への決定的な影響力を持てない」という趣旨のテーマを出しています。

その帝国主義国日本で暮らしている自分たちがどうするのかということを、立場をわきまえて考へなくてはいけない。つまり問題をたてる時に必ず、自分がどういう立場にいるのかを、第一には考えるべきだということです。第二に、今の時代、一数個の先進国でのプロレタリア独裁の樹立」に至る前の時代では、やはり帝国主義のもとに主要な生産力は集中しているのですから、そのときには帝国主義とどう闘うのかという所から考えるべきだということです。

るのだと思います。レーニンが「カール・マルクス」という本の中でマルクスの言葉を引いて言っているように「二〇年を一つに圧縮した数日」が必ず来る。なのに人は困難にぶつかると、小ブルジョア的な影響の中で、よく考えることもしないで、マルクス主義を否定するということになる。どうすれば困難に対しても忍耐、英雄主義、自己犠牲を發揮して闘い抜けるのか。レーニンは「左翼小児病」の冒頭、こう言っています。ボルシェビキの勝因の一つは厳格な規律であった、と言われる。それはそうで、それは無くてはならないが、本当はそれが可能になつてゐるとしたら、その理由、条件を考えることが大切だ、と。そして次のように説明しています。

「第一に、プロレタリア前衛の自覚によつてであり、革命に対する彼らの献身、彼らの忍耐、自己犠牲、英雄精神によつてである。第二に、最も広範な労働大衆、なによりもまずプロレタリア的な労働大衆と、しかしままた非プロレタリア的な労働大衆とも、結びつきをたもち、彼らと接近し、そう言ひたければある程度まで彼らと溶けあう能力によつてである。第三に、この前衛の政治指導

の正しさによつてであり、この前衛の戦略と戦術の正しさによつてである——ただし、それは最も広範な大衆が彼ら自身の経験によつて、この正しさを納得するということを条件とする。」

私自身、活動を始めて二〇年になりますが、やはり、怠惰に過ごして、どこにでも入つていつて活動し、結びついていくことができず、仲間うちに閉じこもるという傾向がありました。反戦派全体にもそれは言えると思います。やはり、これを直して、大衆の中に入り、溶けあつて、その要望を担つて、大衆自身が起ち上がるような形で活動する。そういう唯物論的な作風を身につける必要があります。六〇年代の革命的反戦闘争や、七八年三月二六日の管制塔占拠の闘いはそういうことをやつてきたわけで、これを全人民の中でもやつていかなければなりません。

社会主義理論フォーラムでエコロジストたちが「マルクス主義の人たちは命を大切にしない。地球の危機に対して何もしない」と批判していましたが、本当は、マルクスが「資本論」で書いているように、資本主義による、土地の自然力の破壊、地球の破壊と闘うことこそがマルクス主義なので

例えば、あの大韓航空機事件であれば、アメリカと日本がどう言つてゐるかということから考へるかのようないこみで言われてゐる。未だにアフリカに飢餓があり、アジアの多くの人々が苦しんでゐる、そういう状態を作り出して、日本の、私たちの生活があるわけで、そこから問題を考えていいくべきでしょう。

### 〔三〕

す。

なのに、それを誤解して、プロレタリア階級以外の問題は考えなくていいということに、例えば婦人でもブルジョア階級の婦人の苦しみは関係ないとかいうことになつていて。

資本主義は利潤の為、搾取の為にだけ生産する、それができなくなれば生産力をも倒壊させる。一時帰休などもそうですが、そういうことも含めて、資本主義の腐敗の全ての現れと闘う、それで苦しむ全ての人々と結びついて共に闘う、これがマルクス主義なのだと思います。

「ひろば」にしても、もとは自分たちのグループの発送物にするつもりで始めたら、それが、全体の運動の結合の為の武器にせよ、という要求にぶつかって、迎え入れられ変わつていつたわけで、やはり同じ問題だつたと考えています。

先日、千田是也さんが、部落解放同盟の全国研究集会での講演で、労働者は、他の階級のことを考えない経済主義を脱して、全勤労大衆の状態を解決するということで自己修練すべきだとして、最後にブレヒトの「社会変革をめざす運動の効果的指導のための前提」（資料②）というメモを引いています。

彼らの方が時代をよく知つてゐるわけです。資本家の代理人としてアジアの反日の気運にぶつかり、フィリピンなどの革命の成長を目あたりにしているわけです。そして本当にこれからどうしたらいいのか、と考えている。そういう時代になっています。

「ひろば」発刊の一つの意義はここにもあります。私の同年代の友人で、企業の課長、大学の助教授になっている人たちと会いますと、彼らも、やはり「何かおきるんぢやないか」ということで、それについて考えたいから「ひろば」を送つてくれと言います。

八〇年代に入つて、全体にそういう新しい時代が始まつてゐると思います。マルクス主義は古くなつたのではなく、いまからの時代こそ、マルクス主義が広範な人民大衆から迎えられ、生き生きと理解される時代なのだと思います。帝国主義の国家機構の中にも斥候を送り込み、全ての分野で計画的に、一人よがりではなく、献身的な活動を全力をあげて開始する。そうすれば時代を推進することができる、そういう時代が始まつたのではないでしょうか。

用しておられました。これも同じことだと思います。

千田さんは一九三〇年代のドイツで、ドイツ共产党の宣伝隊にいて、ファシズムの台頭を見たと云ふことで話されました。が、ファシズムは資本主義がある段階でとる專制的な形態であつて、何か特別の、ヒトラーという特別な人間がやつたことではないというブレヒトの見解を支持しておられました。

ファシズムについては、今も靖国神社公式参拝や、スペイ防止法とかで、日本でも議論が始まっていますが、これも、帝国主義者たちの方がそういうファシズムの時代の予兆を感じているということだと思います。

#### 〔四〕

ところで、この全国研究集会は二万人の参加で、うち三分の一以上が行政と企業の人事課でした。千田さんは「社会主义への平和的な移行は幻想である」など、マルクス主義を鮮明に言い切ったのですが、彼らはそれを熱心に聞いていました。

#### 〔五〕

七五年サイゴン解放、カンボジア革命があつて、現在ではフィリピンの革命がベトナム革命前夜を思わせるまでになつてゐる。そういう植民地従属性の人たちの膨大な努力に対し、帝国主義の足元にいる者として、応えて闘わなくてはいけない。「二〇〇年を一ついに圧縮した数日」ということで考えますと、例えば議会のことがあります。私たちは七四年の三里塚の戸村一作委員長の参議院選挙以来、候補をたてることができていません。しかし、こういうことは時が来れば一瞬で台頭するものです。ボルシェビキで考えても、レーニンがあつて、「自分の生きているうちににはもうないかもしれない」と言つた直後に一七年の革命が起きました。そういう具合にある準備をしていれば一瞬で成立するわけです。そういう時に議会や組合についてどうするかという議論を組織して粘り強く活動する、そういう政治指導が何よりも今必要だと思います。

議会について、一つ考へてゐることは、例えば参議院は今、一〇人いないとやれない。しかし、これは、かえて統一戦線の成立を促す可能性が

あります。帝国主義者の側が革命党の結成がある意味では作り出すことだつてあるわけです。議会活動の意義を議論して、革命派の議員を作り出すことを考えなくてはいけません。

労働組合について、全民労協の問題で言えば、「左翼小児病」で言う「反動的労働組合で活動するかどうか」という問題でもあります。全民労協が帝国主義の先兵だということで反発してそこで活動しない傾向があります。そうではなくて、数百万の労働者が反動的思想を持つてゐるならばよいよそこで活動しなくてはいけない。それがごくわずか数千、数万という数であつても、同じである。一九〇五年の十月のような高揚があつて、ブルジョア議会を通じなくとも、広範な遅れた大衆に、労働者階級が影響力を行使できるという時に唯一ボイコットはあるのであって、そうでない限りは、ブルジョア議会や反動的労働組合で活動しなくてはいけない。

私たちは「労働情報」という機関紙で活動している人たちと一緒に毎年全国集会をやっています。それはもちろん重要な意義がありますが、同時に全民労協という反動的組合の中でも、そこの労働

者と苦楽を分かち合つてやつていく必要があると思ひます。

全民労協の統一が進むということは、逆に、そこには新しくふれ合うことのできる労働者が、広大な可能性がひらけてくるという風にも考えなくてはいけない。そこに入つて、耐えて、ある時は沈黙して活動する、そしてあらゆる末端から計画的に闘いを作りあげる。そうすれば、今は微弱に見えて、形はなかなか成さなくとも、レーニンが「自分の生きているうちにはないかもしない」と言つた直後に一七年の十月があつたように、時代を大きく動かすことができるのだと思います。今は当時と比べればはるかに有利であると思ひます。ロシア革命当時はただ一つのプロレタリア独裁の國もなかつたのが、今はソビエト、中国、キューバ、ベトナム、東欧諸国がある。そして第三世界の巨大な闘いがある。だから実は、一番の問題は、日本など帝国主義列強の中で運動する者が義務を果たしていないということです。

〔五〕

最後に毛沢東の文章からお話しします。「我々の学習を改革しよう」という整風文献でこういうことを言つています。

一つは現状を分析すること、二つ目は自国の歴史を学習すること、三番目に世界の革命史を学ぶこと、この三つを提案しています。歴史も現状も、多面的に、データを集め、事実に立脚して考えていくということが必要だと思います。これについては、その一つ前の「農村調査のはしがき」という論文では「調査なくして発言権なし」とも書いていますが、観念的な傾向を排して、事に当たつたら調査して、事実に立脚して考え方抜くことが必要です。

革マル派などはよく「否定的な現実」と言いますが、私は否定的な現実はないと思います。現実は一つ。その中に対立した二つのものを見つけだして、そのどちらが正しいかを考え抜く、そして正しいと思うことをまずはやってみて、その結果を作り出す。身を挺してやってみてはじめて自分

の理論の間違いがわかると思います。人というのは間違いから最もよく学ぶ。そして悔い改めて、自分の理論的な問題がつきつめられて次の一步があるのだと思います。

話はいろいろと中途半端ですが、一七年一一月七日、ロシア革命から昨日で六八年目になる、それになだつて考えていることを話しました。

レーニンの「共産主義における左翼小児病」やコミニンテルン第二回大会の諸テーマは、私たちへの遺言だと思うのですが、その遺志を引き継いで、労働者階級の解放と、被抑圧民族の解放のために、私も頑張りたいと思いますし、皆さんにも、今日ここで出会つたことを出発点として、共にやつていくことを提案して、私の話を終わりたいと思います。

終り

## 【資料①】

☆十月革命から国内戦の勝利まで、ロシア革命の全貌をはじめて描く感動と興奮のドキュメント

ソビエト長編記録映画  
『不滅の数ページ』

ソビエト中央記録映画撮影所  
一九六四年製作

七巻（一時間十二分）

◇シナリオ：アレクサンドル・ベク、イリヤ・コパーリン

◇監督：イリヤ・コパーリン

【あらすじ】

一九一七年のはじめ、きびしい冬のなかでロシアの兵士たちは死と寒さと飢えにおびやかされながら、ドイツ軍と戦つていた。その戦争は皇帝や貴族、大地主や大資本家のための帝国主

義戦争——第一次世界大戦であった。

△第一ページ

「革命は実行された」

一九一七年三月、いわゆる「二月革命」（当時の旧暦では二月）が起きた。ロシアの人民はたち上がってツァーリ（皇帝）の専制を倒した。かれらは平和とパンと土地を求めた。しかし、権力の座についたのは大資本家たちの代表であり、かれらは戦争の続行を叫んだ。人民の不満と怒りは高まつた。レーニンの指導するボルシェビキ党に広範な人民の支持があつまつた。そ

して一九一七年一一月ついに「大十月社会主義革命」が断行さ

れ、権力はロシアの労働者と農民の手に移り、ソビエト政権がうちたてられた。輝かしい「不滅の数ページ」は、かくして開かれる。

△第二ページ

「革命の敵」

一九一八年三月、ソビエト政権はドイツと単独講和を結び、第一次世界大戦から離脱した。誕生したばかりのソビエト政権には、なによりもそのことが必要であった。なぜなら内外の「

国家権力は労働者・農民・兵士の革命的評議会（ソビエト）の手に移つた。ソビエト政権は、直ちに土地を農民にあたえ、主要産業を国有化し、無併合、無賠償の原則による即時平和を全世界によびかけた。この権力奪取そのものは、ほとんど流血を見ることなく、短時日に達成された。

△第三ページ

「ソビエト権力のために」

一九一八年五月、ソビエト政権は労働者と農民の新しい軍隊

革命の敵たちは、社会主義革命を双葉のうちにつみとるべく、牙をむいておそいかかっていたからである。

帝政とブルジョア政府の残党たちは、各地で反革命を組織し、ソビエト政権に挑戦しようとした。一方、かれらを支持し、革命を圧殺するとともに広大なロシアで帝国主義的野心をみたそうとする、諸国の独立資本たちはつぎつぎと干渉軍を派遣した。日本とアメリカ軍はロシアのムルマンスクから攻撃をはじめた。こうして三年にわたる「国内戦」がはじまる。

「赤軍」を創設した。短時間のあいだに四十万人以上の労働者や農民が志願して、赤軍に入つた。かれらは、革命の祖国を守り、全世界プロレタリアートに献身する宣誓の言葉をのべ、「革命の敵」に立ち向かつていった。

△第四ページ

「十月革命のとどろき」

「十月革命のとどろき」は、帝国主義諸国の反革命干渉軍はついに十四カ国に達した。これら干渉軍（「協商国」軍ともよばれた）と国内の反革命軍は四方から、首都モスクワに迫つた。モスクワを中心とするごくわずかの地域を残し、ほとんど全土がかれらに占領された。占領地域では白色テロが荒れ、赤軍兵士の捕虜は虐殺された。また無政府主義者たちは盗賊団と化して荒し回つた。生産は激減し、交通はマヒし、飢餓が広がり、ペストやコレラなどの悪疫が広がつた。まさに「革命の危機」であった。

△第五ページ

「十月革命のとどろき」

## 「勝利」

しかし、労働者と農民の軍隊は、チャバーエフ、フルンゼ、トハチエフスキイ、ブジエンヌイらのすぐれた指揮官にひきいられて、反撃に転じた。全世界の人民はそれぞれの国の政府に「ソビエトから手を引け！」と叫んでたち上がった。黒海に派遣されたフランス艦隊には、ソビエト政権に呼応する暴動がおきた。パリでもロンドンでも、ソビエト政権を支持する大集会が開かれた。ソビエト政権はついにその広大な領土から、内外の反革命軍をことごとく追い払つた。

一九二二年、「国内戦」の勝利——「十月革命」の完遂によつて、諸民族の階級的な同盟にも

とゞく「ソビエト社会主義共和国連邦」が正式に成立したのである。

この「不滅の歴史」の輝かしい伝統は、革命五十周年を迎えたソビエトの若い世代にその行く手を指示しているのである。

この「不滅の歴史」の輝かしい伝統は、革命五十周年を迎えたソビエトの若い世代にその行く手を指示しているのである。

三十年代のファシズムとの戦いの中でブレヒトは、△社会変革をめざす運動の効果的指導のための前提▽という短いメモを遺しています。その中にはつきのような項目がならんでいます。

- 1、党内の指導者思想の放棄と克服。
- 2、中央集権と個人の発意との放棄。
- 3、小市民や農民、つまりプロレタリア化した諸階層を敵視する型にはまつた労働者保護主義の放棄。プロレタリアートはかれらを敵にまわしたり、抜きにしたりして闘つてはならない。
- 4、運動の倫理的な面の強調。ブルジョア倫理の利用とプロレタリア倫理の構築。

実際的な形式としてのプロレタリア独裁。

5、同盟者である諸階層を不誠実にあつかうことへ戦術的にだましたり、中途で置きざりにしたりしないことへをやめ、逆にかれらの眞の利害を感じとり、それを守ること。

6、あらゆる言語崇拜、スコラ学、秘密教義、悪賢さ、一人よがり、実情に即さぬあらゆる思いあがりを清算すること。

△信じろ△と要求することを一切やめ、立証に移つていくこと。

7、人民の大多数にむかつての社会主義の技術的、倫理的優位性を大がかりに宣伝すること。工業プロレタリアートは支配権を要求することをやめ、前衛になることを申し出る。

社会変革の最も単純な、最も清廉潔白な、最短期間ですむ、最も有効な、したがつて最も

発行 尼崎三里塚闘争に連帯する会

連絡先

尼崎住民ひろば

尼崎市東難波町5-18-112-202

☎ 06-1482-18297

一九八六年十一月一日発行